【ねがいましては】

平成２２年３月２３日　　*KYOWA SCHOOL*
第２３３号

「子どもの心を聞く」

灰谷健次郎さんの著書『優しさとしての教育』に、何とも後味の悪いことが書かれています。荒れ続ける学校を「正常」化した経験を持つ教師が語ったこと、「・・・たかが子どもじゃないですか。はじめが大事ですよ。はじめにガーンと一発くらわせるんですよ」

これに対し灰谷さんは感想を求められます。『ここにおいでの先生方は子どもの痛みというものをどう考えておいでですか』とたずねざるを得なかった。

灰谷さんは実際には声に発していません。

まったく同様の感情を読みながら覚えました。

私が子どもたちと触れあうようになって３０年、子どもたちから受け取ったものとして、『心の声を聞く』があります。

「なぜこんなに苦しむのですか。なぜこんなに家族思いなのですか。あなた方は素晴らしい輝き方をしていますよ。私には真似のできない美しい光を発しています。どうかこれからも、その光を見つめさせてください・・・。」

心の中は感謝で溢れます。

私はいつもそんな子たちに囲まれて生活しています。彼らから発せられる叫び、共通点はただ一つ、勉強に苦しんでいることです。そのような子たちに恩返しがしたい。とにかく助けたい・・・。

本当の本物の『学び』を手に入れようよ。それを裏付けるもの・・・彼らの笑顔です。緊張した表情がやがて緩み、小さな笑みを浮かべた瞬間、「良かったね！　本当に良かったね！」

私のこころは温かいものでいっぱいです。

おびえることを知ってしまった子どもたちの心は、そう簡単に開くことはできません。しかも学校生活は続いているわけですから、常に恐怖心と隣り合わせになりながらの取り組みになります。「ここで訴えるだけでは・・・。」

私以外の方のちからも必要になります。それがご家族です。しかしそこには問題が隠れています。おびえる心を手に入れた原因が家族にある場合です。成績に敏感になるあまりに発してしまった言葉・・・。

「なぜこんな簡単なところができないの。」「〇〇ちゃん、毎日家で勉強してるってよ。」「このままじゃ、高校へは行けないわよ。」・・・・・・・

事遅し、子の心は谷底へと落ちていきます。

親の言葉によって、子は親に対する『信頼』を失います。後に残るもの・・・さみしさ。一人ぼっち。

人と人を結びつける最も人らしいもの『信頼』、これが断たれることは、子にとって地獄を意味します。

そのような気持では机に向かおうにも向かえません。

私の訴えはただひとつ、子どもの悲痛な心の叫びを伝えることです。歩こうとしても足がすくんでしまって動けない子どもたち。

次のステップ、お母様やお父様方と子への思いを共通化すること。つまり間違える練習、失敗する練習、点数ではなく、いかに真剣に取り組んだかが尊いこと。助け合うことが優先、隣の子が困っていれば、そっと心の声を聞いてあげられるよう寄り添ってあげよう。学校生活すべての中で・・・。

次のステップ、その思いを担任の先生にも共有してもらうこと。それが一番難しい。なぜなら『成績』という義務がその延長線上にあるわけで、否応なく歩みや通信簿に反映されます。

であるなら先生方にぜひ教室で語っていただきたいのです。「これは国の行っている義務化されたシステム、本来の成績とは、私からあなた方ひとりひとりに充てて書いたことばが真の通信簿だ。」・・・と。

子どもたちにとっての勉強とは、『成績』のことです。家で言われる「勉強しなさい。」・・・これは「良い成績をとりなさい。」と、言われているのと同じです。なぜなら、お母さま方にひとつ質問、お子さんがすべてのテストに１００点をとってきたら、「勉強しなさい。」は言われますか。

成績があることで、テストがあることで、子どもたちは真の勉強を知らずに成長していくことになります。

勉強って何なのだろう？　学ぶことって何なのだろう？

本当の勉強は、こころが温かくなるだろうし、本当の学びも、感動で鳥肌が立つでしょう。

私の仕事はただひとつ、子どもたちを救いたい。子どもたちに楽をしていただきたいとは少しも思っておりません。子どもたちに「勉強するってすごく幸せなことだったんだね。」って言わせたい。

今年、２人目の大学『教育学部』合格者が誕生しました。教育学部ではないけれど、体育の先生になりたいという大学生も生まれました。体を動かすことで、生きることを伝えてください。

あなた方にお願いがあります。・・・・・子どもたちを助けてあげてください。思いやりとやさしさに包まれた子どもたちで溢れる学校を構築してください。そうしたらその学校、きっといじめなどあるはずないよね。